様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 14 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19530701
研究課題名（和文）　学習集団づくりの組織方法論による授業規律形成のための指導評価表の開発研究
研究課題名（英文）　How to guide and evaluate the building of learning discipline in class based on methods to organize the learning group

研究代表者
深澤　広明（FUKAZAWA　HIROAKI）
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：70165249

研究成果の概要（和文）：学習集団づくりによる授業改善に取り組む授業実践事例と組織方法論を検討することで、授業規律の形成を図るための指導と評価の具体的なあり方を開発していく回路が 2 つあり、それらを交差して指導と評価のあり方を開発していくことが必要である。つまり、教科内容や教材といった教科指導の特性が要請する学習方法や学び方のスタイルとして指導される授業規律形成の回路と、学級づくりのなかで培われた自主性や協同性と連動して授業のなかでコミュニケーション・スキルや応答関係のスタイルとして評価される授業規律形成の回路である。

研究成果の概要（英文）：This research pointed out that there were two ways to guide and evaluate the building of learning discipline in class in relation to the fieldwork “Lesson Study”. One way is to guide the building of learning discipline as learning style, which is depended on the approach to learn the subject matter. The other way is to evaluate the building of learning discipline as communication style, which is influenced by the attitude to live together in classroom. It is important and necessary to cross these two ways in order to develop the guideline to assessment the building of learning discipline.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２００８年度	600,000	180,000	780,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：学習集団、授業指導、授業規律、学習規律、学習態度、授業研究、学級経営

１．研究開始当初の背景

授業指導の場面において学習態度や授業規律の指導を行うさいの知見として、戦後のわが国の授業研究のなかで授業の集団過程に着目し集団思考の組織化等で成果を上げてきた学習集団づくりによる授業改造の取り組みがある。しかし、そうした授業研究での知見が、

必ずしも今日の授業指導に引き継がれ、生かされていない現状も、学校現場でのフィールドワーク等で実感する。そこには、もちろん歴史的社会的背景の違いから単純にかつての方法がそのままでは使えないという事情もあるが、それ以上に、近年世代交代が進んだ若い教師の間で、授業で活用するグループや班の編制方法の種類や机の配置のあり方、さらにはグループ内での役割分担やリーダー指導の方法、授業における集団の動かし方や学習規律の評価方法などの学級指導の基本的な知見や技術が十分に伝えられていない現状が伺える。

２．研究の目的

わが国の授業研究において、授業過程の集団的側面に着目し、学習集団の組織方法論の視点から授業指導をささえる学級指導的な教育方法の知見や授業規律の形成過程について明らかにし、そこで得られた知見や指導技術を今日的有効性の視点から吟味し再開発したものを授業研究のなかで検証、評価することを通して、多様な学習集団における授業指導をささえる組織方法論の指導と評価のあり方を開発する。そのさい、わが国の授業研究の歴史のなかで学習集団づくりを展開してきた地域での授業研究のフィールドワークを行うとともに、国際的視点からケアや学びのコミュニティ、学級指導に着目しているドイツや米国の動向を視野に入れて検討する。

３．研究の方法

学習集団の組織方法論という視点に立って、歴史的にも、あるいは現時点においても、学習集団づくりによる授業改善に取り組む、広島、長崎、高知を中心にフィールドワークを展開し、戦後授業研究の知見がどのように継承され、どのような技術が実際に授業のなかで使われてきているかを、聴き取り調査も含めて行い、収集した授業研究の比較検討を通して、学習集団の組織方法論の特質を明らかにする。

国際的な学習集団や学級指導の動向については、文献研究による特徴の解明のみならず、ドイツへの現地調査を行い、関係者への聴き取り調査を行い、授業指導を支える学級指導的側面や学びへのケアのあり方の違いについて検討する。そのことによって、日本だけ見ていては気づかないであろう日本の授業研究での組織方法論の特色について検討する。

以上２つの調査研究とフィールドを交差させながら、これから求められることが多くなる多様な学習集団における授業指導を支える組織方法論を、授業規律形成のための指導と評価の具体的なあり方として開発する。

４．研究成果

（１）学習集団づくりの組織方法論の整理

戦後の学習集団づくりによる授業規律形成に関する知見の蓄積と交流に寄与してきた長崎県および高知県における小学校での授業実践に関するフィールドワークをすることで、歴史的な教育方法遺産と今日的な教育実践課題についての基礎資料を収集するとともに、情報交換を行うことができた。とくに、長崎では、毎年８月に行われている伝統的な合宿型の授業研究会に参加することで、教育現場の生の声を聴き取り、３学期に実施した授業研究フィールドワークの打ち合わせを十分に行い、実施後にビデオ等を活用して研究室で振り返りの研究活動ができ、学習集団づくりの授業研究に固有な視点を明らかにし、そのための基礎資料を作成した。そうした研究の発端となる広島県での学習集団づくりによる授業研究については、本年度現地調査を実施した群馬県の島小学校長であった斎藤喜博や岩手県杜陵小学校との比較検討を行った。また、授業規律の指導評価表の作成に当たっては、学習集団の発展段階に関する構造表を、わが国の教育実践のなかから、いくつか発掘するとともに、今日的視点から評価を行うさいの観点について検討した。

（２）学習規律と言語技術の指導関連の解明

1960年代の全国授業研究協議会（全授研）の潮流の一つである学習集団づくりの組織方法論の一つとして定式化された授業における「発言形式」のあり方について、今日の教育課程改革の言語論的展開の動向の一つでもあり、さらに新しい学習指導要領にも示された「言語活動の充実」とも関連するところの「言語技術」のあり方として教室で展開していることと連動させて、言語技術と学習規律の関連を歴史的かつ実践的に検討した。授業規律の問題が、授業のコミュニケーションと関連していることから、「言語技術」の指導が、学習規律の指導に置き換えられやすい実態のあることを調査研究に基づき検証するとともに、授業研究等を通して教科内容習得の視点から言語技術や学習規律が形式化しやすい課題をかかえていることを明らかにした。

（３）授業比較による規律指導の回路の構築

収集した授業研究の資料を、とりわけ学習規律形成の視点から、いくつかの授業を比較検討することで、教科内容へのアプローチのし方が自主的な学習のスタイルを要請し、それが習慣化していくことで授業規律が形成される回路と、学級づくりで培われた自主共同の学習規律形成が話し合いや討論のある授業の展開とそれを支える教材研究を要請する回路との、二つの回路が実践的な仮説として想定されることが明らかになった。さらに学習集団づくりの組織方法論の一つとして普及している「指導的評価活動」について、授業者が授業のどの場面で使用しているかの分析を行い、授業規律形成のための指導評価表を開発するための条件的な基礎資料を得ることができた。また実施した授業研究の関係者への聞き取り調査を個別に実施することで、授業記録に表れている言動を支えている教師の教育観や授業規律観についての知見を深めることができ、指導評価表を支える教師の理念や構えの重要性を再認識した。

（４）規律指導をめぐる海外動向からの示唆

ドイツでの調査では、ブエブ（Bueb, B.）の『規律の礼賛』（Lob der Disziplin）をめぐる争点について、ハンブルグでのグードヨンス（Gudjons, H.）との面談等を通して基本文献を入手するとともに、クラスの前に立つ教師の「一斉授業」（Frontalunterricht）を捉え直す必要性について検討し、わが国の授業規律の指導評価にとって有効な観点をえるための基礎資料を収集した。こうしたドイツ教育学における規律をめぐる言説について、アメリカの規律をめぐる言説と対比することで、わが国の規律指導の言説の動向を国際的な観点から見直すことができた。

（５）指導評価表の簡素化

授業規律形成のための発展モデルについては、より使いやすい指導評価表にしていくために、これまで収集した指導表や構造表をもとに、本質的な内容項目を精選するとともに、簡素化を図る必要がある。そのために、全体を振り返る総括的な研究協議会を開催し、今回達成できなかった「有効性の検証」のための評価視点の開発研究にむけての枠組みを検討した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①深澤広明・北川剛司・樋口裕介「授業規律の指導に関する今日的争点と課題－アメリカ及びドイツにおける動向を手がかりに－」中国四国教育学会編『教育学研究』第55巻、2010年、53－63頁、査読無し。
②深澤広明・長谷川清香・真嶋正文・溝上大輔「学習集団づくりの組織方法論と言語技術の指導体系との関連に関する一考察」中国四国教育学会編『教育学研究』第54巻、2009年、125－136頁、査読無し。
③深澤広明「『言語活動を充実する』学習集団の授業づくり」『現代教育科学』（明治図書）629号、2009年、17－19頁、査読無し。
④深澤広明「『学力』像の転換から『全

員参加』を問い直す」『国語教育』（明治図書）688 号、2008 年、8－10 頁、査読無し。
⑤深澤広明・熊井将太・八木秀文「戦後授業研究における学習集団づくりの組織方法論」中国四国教育学会編『教育学研究』第 53 巻、2007 年、152－163 頁、査読無し。

〔学会発表〕（計 3 件）
①深澤広明・北川剛司・樋口裕介「授業規律の指導に関する今日的争点と課題」中国四国教育学会第 61 回大会、2009 年、11 月 21 日、島根大学。
②深澤広明・長谷川清香・真嶋正文・溝上大輔「学習集団づくりの組織方法論と言語技術の指導体系との関連に関する一考察」中国四国教育学会第 60 回大会、2008 年 11 月 30 日、愛媛大学。
③深澤広明・熊井将太・八木秀文「戦後授業研究における学習集団づくりの組織方法論」中国四国教育学会第 59 回大会、2007 年 11 月 24 日、広島大学。

〔図書〕（計 1 件）
①深澤広明「集団づくりアプローチ」日本教育方法学会編『日本の授業研究　Lesson Study in Japan　下巻　授業研究の方法と形態』学文社、2009 年、60－71 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
深澤　広明（FUKAZAWA HIROAKI）
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：70165249

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：